連載―レマン湖に映った日本像―③

国際電気通信連合事務総局長の任務を終了して

内海善雄

Utsumi Yoshio
前国際電気通信連合（ITU）事務総局長

東京大学法学部、シカゴ大学政治学部卒、MA、郵政省通信政策局次長、国際部長、総務審議官、郵務局長、審議官など歴任、1999～2006年、国際電気通信連合（ITU）事務総局長。

8年のITU事務総局長の任務を終えた内海善雄氏。国際社会の“政治”の“非情”を痛感。また、任務にふさわしい“成果”など、感想をまとめていただいた。なお、ITU事務総局長の重責の後の仕事はいまのところ未定とのこと。（編集部）

8年間の任期中誇ることができる一番の成果はインターネット電話の普及

国際社会で学んだこと

8年間、国際機関（ITU）のトップとしての大役を大過なく終了することができ、正直、肩の荷を降ろした気持ちである。

実に多くのことを学んだ。これからの余生は、これらのことを少しでも後進の方々にお伝えすることが責務であるかと思う。

その中で、何を一番伝えたいかと尋ねられると、それはなんといっても、「自分は甘かった」ということである。8年間まさに、毎日毎日、このことを感じてきた。8年目の後半になって、やっと、自分も国際社会が分かってきたと思うように感じた時があったが、最後の全権委員会議の選挙では、「やはり甘かった」と、煮え湯を飲まされることになった。もちろん、私自身の未熟さが原因である。

一言で言えば、国際社会は、表面はきれいごととで化粧をされていることが多いが、実際は、“悪の権現”であるということである。個人レベルの行動においても、また、国家レベルでも、正しいことを追求しょうと考えている者は、極めて少ないということである。皆自己の、あるいは、国家の私益を追及しているのであるが、表面はその底意を厚化粧して見えなくしているので、悲しいかな、未熟者には誰が本当に正直者で、誰が悪人かを、なかなか見抜けないのである。

また、悪人であることが明白な者も、また誰が見ても不正なことも、国際社会では、多くの悪人たちから支持され、大手を振ってまかり通るという悲しい現実も、私には、耐え難いものであった。強いものが勝ち、弱いものは、正しくても負ける。したがって、サーバイバルのためには、弱いものは、主義や主張を変えても、強いものの庇護下にならなければならないし、生きるための二枚舌は日常茶飯事である。

そのようなことは、当然で、いまさら何を馬鹿なことを言っているのかという批判は、もちろん甘受するところである。しかし、私は、そのような批判をされている日本の方々も、厚化粧の下の素顔を、まったく、お気づきになっておられない場面を多く見て来た。日本人全体が、いくら理屈が分かっていても、甘ちょろくて、国際社会の厳しい現実に対処し切れてない姿を8年間、ずうっと見てこざるを得なかった。

このことは、日本社会が、この地球上では、極めて異質の社会であることに起因するのではないかと思う。16世紀ごろ、西洋の宣教師たちは、武器のない琉球、すなわち戦争がない国があると驚いた記録を残しているが、戦国時代を経由した本土でも、その後の長い平和な時代を経て、また、為政者の儒教教育の徹底により、日本人の体から、戦国時代のような、下剋上、裏切り、策略の遺伝子が消えていったのでないかと思う。

JSTVで楽しんだ『功名が辻』の山内一豊は、本当にあのような実直で正直者であったのだろうか。そんな正直者が、信長、秀吉、家康と三代の英雄の家来として、戦国時代にサーバイブできるのだろうか?「品格ある国家」が、国際社会で生き残れるのであろうか?

国際社会は、まさに戦国社会であり、策略や裏切りは、日常茶飯事であり、私は、それに長けたものだけが生き残る現実を、見すぎたのかもしれない。

正直者がそれなりに評価される平和な日本社会が恋しい。そこに帰れ、毎日、戦いを挑まなくても、なんとか生きていける国に、永久のねぐらを得られることは、これ以上の幸せはないように思う。

任期8年間の成果

ところで、この8年間で、いったい何をやったのだと尋ねられると、お聞き苦しいとは思うが、いろいろ自慢したいことが浮かぶ。

中でも、一番我々の生活に大きな影響を与えたことは、インターネット電話の普及に貢献したことであろう。もちろん、インターネット電話は、ITUが発明したものでもなければ、許可したものでもない。しかし、この普及促進は、従来のITU活動である地道な標準化活動や電波分配の調整ではなく、私が自らすすめたITUが電気通信政策に積極的に重要な役割を担うという新しい役割の成功例である。

着任当時の8年前、インターネット電話は、既存の電話ネットワークを破壊するものとして、ほとんどの国で禁止されていた。しかし、その技術的可能性は、疑う余地がないものであった。若いころに担当したデーター通信の自由化と同様、どんなに法律で禁止しても、優位な技術の普及を禁止しきれるものではないことは明白であった。また、この技術を、早く受け入れる国と、受け入れない国との間では、大変な情報格差が起きることも容易に予想された。

そこでこの技術の可能性を啓蒙すると同時に、できるだけ早く世界的に導入することにより、この地球上に、距離感のないバーチャルな単一世界を築けると思った。また、それを進めるのが、ITUの使命であると考えた。これも、若いときに取り組んだ東京と同じ電気通信料金の特別地区を創造するという元祖テレトピア構想の世界版であった。

啓蒙のために一連のワークショップの開催と、普及促進のための意見書を作るための世界通信政策フォーラムの開催を提案した。

「ITUの挑戦」の成果

IP電話が普及すると、電話料金は、きわめて安くなり、また遠近格差がなくなり、情報革命が起きる、今ITUは大変なことに取り組んでいるのだと、何度も新聞記者にレクをしたが、当時の新聞には、残念ながら、ほとんど取り上げられなかった。

当然、既存の電話会社から強い反対が寄せられると予想したが、予想は見事に外れた。既得権益を損なわれるはずの電話会社の動きは鈍く、表立った行動を取れなかったのに対し、本来利益を受けるはずの米国のインターネット関連業界の人たちは、ITUがインターネットの世界に入り、インターネットをコントロールすると強く反対運動を起こし、私は批判のターゲットとなった。誤解を解くために多くのエネルギーを消費した。

紆余曲折があったが、政府と業界が同時に参加した2年後の第3回世界通信政策フォーラムで、インターネット電話は、禁止するのではなく、積極的に普及させ、また、そのためにITUは開発国への技術協力を行うという意見書が全員一致で合意された。

一方、1999年にジュネーブで開催された世界テレコムの展示では、各メーカーともIP関連技術の展示を積極的に行い、これに啓発された開発途上国の高官のなかには、新規投資はIPネットワークのみとする決意をする者も続出した。もちろん、一方では、既存の電話ネットワークとIP電話との接続を中心とする技術基準の地道な標準化活動も、ITU標準化局で行われた。

このような背景の下に、IP電話が急速に普及し、国際電話の価格破壊、また、ネットワークは回線交換からIPへと電気通信の革命的変革が起き、業界地図も大きく変わったのであった。そして今や、IP電話という言葉も死語に近くなり、NGN論議と引き継がれているのである。

もちろん、ITUの活動がなくても、早晩、同じような結果が起きたであろうが、この動きを、かなり促進したことには間違いないと密かに自負しているところである。

ジュネーブに着任した当時のジュネーブ東京間の国際電話は、3分間で千円は超えていたと思うが、今は、ジュネーブ市内通話とほぼ同額の料金となり、個人的な恩恵も計り知れないものとなった。